

江戸・東京の漆器流通と漆物問屋 一九世紀を中心に

Lacqueware Wholesalers and Distribution of Lacquerware in Edo/Tokyo: A Focus on the 19th Century
IWABUCHI Reiji

岩淵令治

はじめに

江戸時代に入り、政治的安定を迎えた一七世紀後半以降、庶民の需要の増大、手工業の技術の発達にもとづき、各領主の奨励のもと、各地で風土に適した特産品が成立していった。さらに、一八世紀後半以降は、各藩の藩政改革に伴う藩専売の展開の中で、技術革新や流通統制が進められ、特産地の形成と淘汰がすすんだ。漆器もこうした特産品の代表的な製品の一つであった。

近世の漆器については、半田市太郎の一連の研究が一つの到達点となっている。^①ただし、流通については、当時の幕藩制市場論^②の議論の中で、産地問屋と江戸問屋による流通体制の確立と、その独占に対抗する体制外の流通との対立に分析の主眼があり、都市内における流通や消費の実態^③については不明な点が多い。加えて史料的な制約もあり、とくに江戸の塗物問屋の分析は、史料の残存状況により、京都の柏原家が安永三（一七七四）年に買収した黒江屋の分析が唯一である。^④一九世紀の間

屋仲間は二十数名であるが、このうち他国住商人は三名に過ぎず、^⑤上方商人の出店となった黒江屋の業態は必ずしも江戸塗物問屋の標準とはいえない。

そこで本稿では、消費地における流通も視野に入れて江戸における漆器の流通の概要を確認した上で（一）、江戸・東京の塗物問屋である会津屋（杉田）徳兵衛家の事例分析を行いたい（二）。同家の文書^⑥は近代のものが中心で、経営史料は断片的であるが、遺された史料より可能な限り分析をすすめ、他国住商人の江戸店に比して立ち後れている江戸住商人の研究にも寄与したい。

一 近世における漆器の大衆化

1 漆器生産の成長

まず、近世における漆器生産の展開を確認しておきたい。^⑧江戸時代初期の俳諧論書『毛吹草』（正保二（一六四五）年刊）では、各地の名産の記述で山城（塗師細工ほか）・大和（塗桶・塗鉢）・和泉（中浜塗木履・

表1 明治7(1874)年の各府県における「漆器類」生産額

産出額	該当府県 (円)
10万円以上	石川 (109599.12), 静岡 (104536.72), 若松 (101966.14)
5万円以上	京都 (79035.275), 大阪 (67133.532)
3万円以上	愛知 (46358.38), 敦賀 (35850.485), 新川 (35020.75), 新潟 (32407.759)
2万円以上	筑摩 (29169.859), 東京 (23966.684), 広島 (22383.695)
1万5000円以上	栃木 (19914.66), 愛媛 (19402.575), 和歌山 (17042.5), 熊谷 (16070.437), 宮城 (15489.767)
1万円以上	豊岡 (13522.65), 度会 (11485.43), 北条 (10950.4), 置賜 (10869.08)
5000円以上	水沢 (9803.25), 島根 (9646.57), 長崎 (7160), 白川 (6686), 奈良 (6166.175), 三重 (5119.3), 小田 (5000)
1000円以上	岐阜 (4729.143), 埼玉 (4561.45), 浜松 (4265.485), 足柄 (4250.12), 山梨 (3237.4), 相川 (3044.65), 秋田 (3004.48), 岩手 (2735), 青森 (2579.64), 新治 (2381.25), 飾磨 (2152.76), 茨城 (1945.818), 高知 (1797.455), 福島 (1433.46), 山形 (1386.71), 神奈川 (1025)
1000円以下	鳥取 (852), 小倉 (591), 浜田 (527.725), 酒田 (500), 兵庫 (304.999), 名東 (290), 宮崎 (276.1), 千葉 (214), 岡山 (28.62), 長野 (15)
金額不明	鹿児島
書上なし	堺, 滋賀, 磐前, 山口, 福岡, 三瀧, 大分, 佐賀

[明治7(1874)年『府県物産表』より作成]

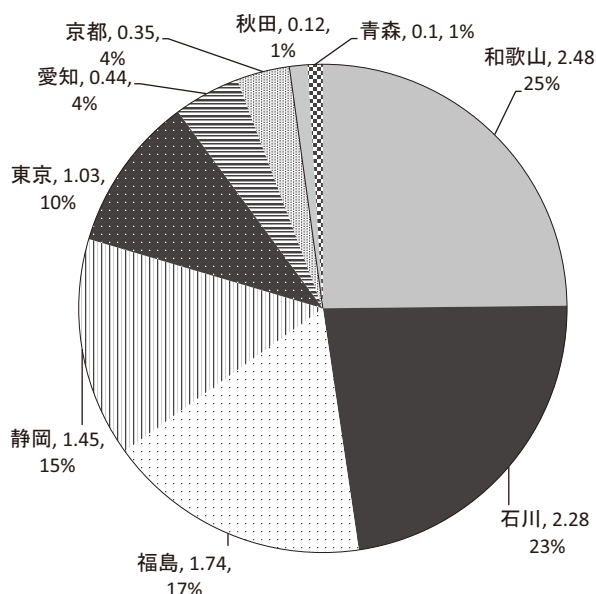


図1 明治前期における漆器の有力生産地
(年産額2万円以上の生産額比較 単位=万円)
[『興業意見』明治17(1884)年より作成]

表2 明治7(1874)年の「漆器類」の概要

分類	製品名
食	<p>食器</p> <p>碗, 組碗, 曲物飯器, 飯櫃・飯鉢・飯次, 鉢・木鉢, 大平皿, 硯蓋, 蓋・盃, 盃洗, 盃台, 菓子器・菓子鉢, 盛物台, 重箱・小重箱, 切溜, 重箱台, 飯台, 広蓋, 菓子盆, 折敷・折敷膳, 総輪膳, 八寸膳, 盆, 木盤, セツ入小宗和台, 箱膳, 食籠, 弁当・弁当箱・行厨・行厨箱・子型, 提重, 提箱, 楊枝刺・楊枝箱, 行器, 三宝, 組台, 匙, 杓子, 箸, 箸箱</p> <p>嗜好品用具 (茶道具・喫煙道具)</p> <p>茶器, 茶箱, 茶入, 茶台, 茶船, 面桶, 菜入 (= 残菜入) / 煙草盆, 巻煙草刺</p>
住	<p>家具関係</p> <p>塗卓, 机, 紙張机, 鏡台, 鏡台針箱, 化粧台, 文庫, 三ツ入小文庫, 筆筒, 帳帳筒, 戸棚, 長持, 鉄線付ケ用長框, 行灯, 手行灯, 角行灯, 燭台, 火鉢, 火鉢台卓, 煙草盆, 巻煙草刺, 金机刺, 塗枕・枕・箱枕, 蒔絵花瓶・花生, 衣桁</p> <p>建具ほか</p> <p>塗建具, 額縁, 建具縁・襖縁・屏風縁</p>
宗教関係	<p>仏壇, 仏壇荘厳, 仏壇下地, 御厨子棚, 神仏像, 位牌, 木魚, 仏前台, 前机, 華足台, 仏器, 神輿</p>
その他道具	<p>諸手道具, 諸手道具箱, 青貝針箱, 栗木針箱, 針箱, 手箱, 硯箱, 塗鞘・鞘, 一閑張塗, 挟箱, 鏡の套・鏡覆, 鉄漿盥・鉄漿箱, 耳盥, 釘箱, 釘箱棚, 板笠, 塗木櫛, 櫛箱, 印籠, 香入, 団扇, 両掛, 提灯輪</p>

[明治7(1874)年『府県物産表』より作成]

註) 分類については, 文化庁内民俗文化財研究会編著『民俗文化財の手びき』(第一法規, 1979年)等を参照した。製品名は史料の表記をそのまま記した。

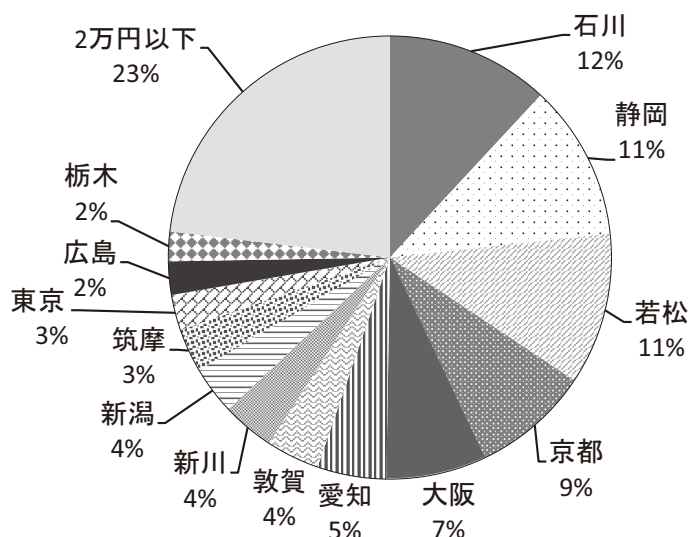


図2 明治7(1874)年『府県物産表』にみる各府県の漆器生産額
[『府県物産表』明治7(1874)年より作成]

常器(椀)・近江(朽木塗物 盆鉢・五器など)・陸奥(会津 薄椀・薄盆)・石見(濱田折敷)・播磨(清水折敷)・越前(塗笠)・紀伊(黒江洪地椀 根来椀・折敷)〔昔寺繁昌之時拵タル道具ト言、当時方々ニテ売買之〕・伊予(塗板)・筑前(折敷)・肥前(唐蒔絵)・日向(五器)をあげている。すでに半田が指摘しているように、旧来の朝廷・貴族の需要に応じた畿内の工芸品生産から、椀・折敷などの日用品が地方でも生産されてきたことがうかがえる。さらに、江戸時代中期のいわば百科事典である『和漢三才図会』(正徳二(一七一二)年刊)では、諸国の土産で、山城(塗物)、大和(塗桶 奈良、塗挽蓋、吉野食次)、紀伊(椀 名草郡黒江)、陸奥(椀 会津)、下野(椀・折敷 日光 同(日光)盆・木鉢)をあげている。また、漆椀の項目では中世以来の根来は絶えて大坂・京都が最上品になったとし、ほか江州日野、紀州黒江、奥州会津、摂州堺をあげる。根来の衰退や、下野の登場など、地方の名物としての成長がみられるといつてよいであろう。近世後期の番付「諸国産物競」では、日光・駿河・会津・津軽・出羽の産物として「塗物」をあげており、これらの地が生産地として意識されていた。

近代に入ると、各地の産物の統計によって漆器生産の広がりを確認することができる。明治一七(一八八四)年末に農商務省が印刷配布した政策構想の書『興業意見』は、地方産業の振興によって国富・国力の向上を図り、海外の先進国に迫ることを目標としたものであるが、この中で、漆器は欧米に向けた「重要貨物」の一つとして重視されている。漆液の欠乏と、「仏国模造品」によってアメリカへの販路が脅かされている現状を憂い、改良案も提示されている^⑪。また、図1は、明治一一(一六六)年の平均の年産額一四二万四九七〇円をもとに、産額二万円以上の府県を比較するために同書に掲載されたグラフから作成したものである^⑫。生産量ではなく生産額であるが、黒江塗の和歌山、輪島塗の石川、会津塗の福島、駿河塗の静岡が有力生産地の総生産額の八〇%を占めていた

ことがうかがえる。また、『興業意見』では全国の生産状況が不明なため、表1・図2には、最初の全国物産統計とされる明治七(一八七四)年『府県物産表』^⑬より、各県の生産額を示した。北海道と沖縄県は対象外で、かつ今日の区分とは異なる三府六〇県である点に留意が必要である。さらに、統計の精度が完全ではなく、とくに和歌山の生産額が低い点に疑問が残るが、そのほかの上位は『興業意見』と同様に石川・静岡・若松(会津)が占めている。一方、生産額が計上されていないのは八県で、うち九州が半数を占める。この八県以外は、少額の生産額であっても、各地で漆器が生産されていたことがうかがえよう。

また、近世には、漆器の機種も前代に比べ、多様化した。近代初頭の段階ではあるが、表2は同じく明治七年『府県物産表』の「漆器類」の主な品目を抽出し、便宜的に分類したものである。各府県で品名の統一が図られていないため、同じ製品でも地域によって異なる表記になっているものがみられるが、原表記を尊重した。各府県で頻出するのが、食器としての椀、膳類、収納具としての文庫で、日用品として漆器が各地で生産されていたことがうかがえる。このほか、食器関係では盛りつけの器のほか、酒器、弁当箱、重箱、収納・運搬の器や箸など、茶道具、机や筆筒・照明具などの家具、宗教関係の道具、櫛などの装身具や化粧道具など、漆器がさまざまな道具で用いられていたことがうかがえる。

2 江戸・東京の漆器流通

こうした各地の漆器を江戸で荷受する問屋は、十組問屋仲間の一つとして仲間を結成しており、文政二(一八一九)年段階で二六軒、株仲間解散令後の再興時(嘉永四(一八五二)年)で仮組を含めて二五軒が組合の構成員であった。すでに半田は、塗物問屋仲間を四段階に分けて分析し、産地ごとの荷主の商人仲間と連動して江戸移入塗物を独占していたことを重視している^⑭。ただし、半田も指摘するように、問屋による流

通の独占体制は、株仲間解散以前から揺るがされていた。そしてこうした状況が、問屋自身もかわった多様な流通によるものであった点は、実態という意味で、半田の指摘以上に留意しておく必要がある。

ここでは、半田も注目した天保期の会津塗の流通をみておきたい。⁽¹⁵⁾半田は、とくに荷主側である会津若松の江戸出し塗商人株仲間と、江戸十組問屋株仲間の二番組塗物問屋の間で天保三（一八三二）年に起きた争論をとりあげ、会津商人による江戸問屋の漆器流通独占を打破する運動とその限界、妥協と評価した。また、松田暁子はこの一件後の天保一二（一八四一）年の史料より、会津藩の国産品政策を検討している。⁽¹⁶⁾以下、後者の史料から、藩専売の販売が停滞する中で再検討された問屋以外の者（「外店」）への残荷の販売、および問題視された抜荷と粗悪品の流通の実態に注目したい。

まず、問屋以外の商人については、天保一二年三月一日付の文書で江戸勘定頭が見解を述べている。⁽¹⁷⁾江戸勘定頭は、商人に外店への販売捌の利潤を尋ねたところ、「御府内^二而^一問屋共店前小売致、外店^与申候^而も軒数^者有之様ニ候得共、荷卸可相成程之店ハ漸^而三軒も可在之歟ニ候処、問屋^与違ひ取引も致悪ク、尤延代敷金等ニ相成候発も有之、且ツ外店^江直捌致候て、捌高増直上ケ等ニて可罷成須ク無御座、反^而抜荷持込候伝手杯ニ相成間敷儀ニ無之形り申出」としている。また、「外店」について、会津若松の商人司梁田仙右衛門は江戸の塗物問屋二六軒に対して「外店^与唱候分ハ大凡五六百軒有之由」としている。⁽¹⁸⁾このことから、①江戸では問屋自身が「店先小売」をしていること、②問屋以外の店（「外店」）はおおよそ五・六〇〇軒あるものの、卸売が可能で商売の相手になりうる店は二・三軒で、かえって支払いが滞るような店が多く、かつ抜荷の取引先にもなる存在だったことがうかがえる。

このほか、問屋を通さない流通について、藩側が記した伝聞が注目される。⁽¹⁹⁾近年流行した駿河塗は値段が下落したため、古道具屋などに売っ

たところ、「出店」に並ぶようになった。しかし、江戸では「出店」に出ている商品は贈答はもろんのこと、会食（「寄合」）でも一切用いない慣習があるため、「下品」として用いられなくなったとしている（「当地之振合、出店へ持参候品ハ賤之贈答ハ勿論、諸寄合之席ニも一切不相用由^二而^一、右以来ハ益駿河塗^二而^一下品之唱ニ相成、次第ニ不向ニ相成候由相聞」）。つまり、問屋を通しての販売が江戸での商品の信用を担保し、またその一方で「出店」などで安価に取引される商品もあったのである。「出店」は、おそらく前出の五・六〇〇軒に含まれるものであろう。

一方、抜荷は、会津塗の値崩れを招く粗悪品の流通としても問題視された。天保一二年三月一日付の藩の調査書「御国産捌一条ニ付吟味書」によれば、水戸から積み出した「田舎出塗物」が、途中で行方不明となつて江戸に持ち込まれたり、荷受先の他国の商人が江戸近くで荷物を隠し置いてから持ち込むなどして、江戸に流通していた。⁽²⁰⁾この「田舎」向けの商品は、江戸向きの商品よりも「手拔之品」で、塗りに「似タリ粉」を使っているため、新品のうちはよく見えても、一度使うと光沢が消えて黒くなるから、「堅固淳（純）直」と言われていた「御国産」の品が「産物」と呼ばれるようになってしまふ、としている。こうした粗悪品も、先の問屋以外の店で販売され、流通したのであろう。

さらに、粗悪品の扱いは、問屋も実は無縁ではなかった。株仲間再興時における江戸の塗物問屋仲間の規定書では、組外での引受や、「組外之者へ名前貸遣シ仕入爲致候歟、又ハ取次等致シ遣し候儀」を堅く禁じており、さらに以下の一条が設けられている。⁽²¹⁾

- 一 当地組合之内^二而^一塗物仕入方、縦令代呂物手拔ニ相成候^而も下直ニ仕入致度仁有之由、尤田舎商内又ハ卸売等専ニ被致候得^者、其筈之事ニ候得共、諸国^方出候下物定品等ニ直段之高下有之候^而ハ仲間内之不取締ニ相成、第一品ヲ劣らせ候儀ハ被仰渡候御触之廉ニも相背恐入候事ニ候、尚亦荷主方^二而^一も右様之義申入候とも一切請引被

致間敷候、併押^而被申候得ハ不正之義^与承知乍致、売人買人之差別も有之、断も難申、不得止事^而扨ト自分ニ^而道理を附、内々ニ^而請込荷物差送り、後日相知れ候ニおめてハ組合^者仲間ヲ相除キ、荷主ハ一同取引相止メ可申候、此段双方一統堅相守可申候事

ここでは「手拔」の製品であつても「下直」で仕入れることを望む問屋や荷主との関係で取り扱う問屋があり、諸問屋再興令の趣旨に背くとともに、下り物の値段が不統一になるとの理由でこれを仲間では禁じている。⁽²²⁾「手拔」の製品は具体的には不明だが、これまで見てきたような地域販売用の粗悪品が該当する可能性が高い。実際には、問屋も粗悪品を扱っていたのである。

このように、株仲間解散令以前においては、問屋を商品の信用の担保とする贈答用や会食用の上級品と、値崩れした商品および工程を省略した安価な地方向けの商品が江戸で流通していた。後者については「出店」など五、六〇〇軒にもよる問屋以外の店（「外店」）で庶民に向けて販売され、また問屋自身が扱う場合もあったと推測される。問屋以外の商人については不詳であるが、たとえば『江戸買物独案内』（文政七（一八二四）年刊）にみられる「万塗物所」や「萬塗物小箱所」がそうした商人にあたると思われる。

このように、巨大都市江戸には、さまざまなレベルの漆器が流通していたのである。江戸遺跡の調査で検出される多様な漆器も、まさにこうした漆器の大衆化を示すものといえるだろう。

二 江戸・東京の塗物問屋

―会津屋徳兵衛を素材として―会津屋の概要

1 会津屋の概要

では、江戸住の塗物問屋の例として、会津屋（杉田）徳兵衛を検討しよう。会津屋は、日本橋青物町の有力な塗物問屋で、前章の会津塗物の

出入一件では、年交代であつた塗物問屋仲間の行事として登場する。同家の伝承⁽²³⁾では、初代が三河国碧海郡六ツ美村（現愛知県岡崎市）より享保二（一七一七）年に江戸に出て、漆器問屋「会津屋」に奉公し、やがて商いを継いだという。当主であつた杉田倍三氏の調査メモによれば、初代兄の没年が寛延二（一七四九）年、二代目の没年が天保一二（一八四一）年であり、おおよその進出時期は符合しよう。

また、伝承によれば、横浜開港後は、四代目徳兵衛が明治一〇年に「松栄館」という名で出店したが、「漆器の貿易で英国人に騙され、現在の金額に換算して約一〇億円の損害を被り、「松栄館」は撤退⁽²⁴⁾」し、この負債を五代目徳兵衛が完済したのち、「明治四四年ごろ、日本橋の店舗を売却し、一時期台東区へ移動したのち、現在の地である、文京区小石川（旧：餌差町）へ移⁽²⁵⁾」り、現在の有限会社會津屋漆器店に至つたという。

次頁の表3には、明治一九年一月に認可され、設立された東京漆器問屋組合の組合員を示した。このときの組合結成申請では、会津屋が桜井伊助（黒江屋の店主）とともに総代をつとめている。⁽²⁶⁾同組合は、明治二二年に東京府の調査に対して江戸の塗物問屋の業態を回答していることから、江戸塗物問屋仲間の後裔と考えられる。⁽²⁷⁾組合員の人数は二四人で、近世の塗物問屋仲間の二六名とほぼ同数であるが、文政七（一八二五）年以降の者は五名、これに幕末に加わつた者が二名で、三分の二以上が入れ替わっていることがわかる。また、一定額以上の納税者を収めた明治二五年以降の『日本全国商工人名録』⁽²⁸⁾などでも、掲載され続ける者は半数程度に過ぎない。こうした中で、会津屋は、一貫して登場する重要な存在である。また、すでに半田によって分析された京都が本店の黒江屋とは、仕入・販売が異なる可能性があるだろう。

以下、同家の文書より、江戸・東京の塗物問屋を検討したい。

2 資産

会津屋の総資産は不明であるが、文化一〇（一八一三）年には塗物問

表 3 明治 19 (1886) 年 12 月 東京漆器問屋組合員の出自とその後

	①文政7 (1824) 年	②嘉永 7 ~ 明治元 (1854 ~ 1868) 年	③明治 2 (1869) 年	④明治 19 (1886) 年 12 月	東京漆器問屋組合	⑤明治 25 (1892) 年	⑥明治 27 (1894) 年	⑦明治 31 (1898) 年	⑧明治 40 (1908) 年
1	○	黒江屋太兵衛	通一丁目伝左衛門地借 (京住)	○	柏原孫左衛門 (店主 櫻井伊助)	日本橋区通一丁目 18 番地	○	○	△ 236.000 □ 4.180 黒江屋
2	○	会津屋徳兵衛	青物町清助地借	○	梶田徳兵衛	日本橋区青物町 3 番地	○杉田 邦太郎	○杉田 邦太郎	△ 28.200 □ 3.500 ★
3	○木村屋喜三郎	木村屋平右衛門	本材木町一丁目長兵衛地借 (紀州住) ※嘉永 6 年 12 月 15 日、平右衛門と改名	○	木村平右衛門 (店主 裕文七)	日本橋区本材木町一丁目 1 番地	○	○	△ 87.000 □ 3.000 蠟燭兼
4		近江屋藤右衛門	通二丁目平兵衛地借	○	小林藤右衛門	日本橋区通式丁目 18 番地	○	○	△ 97.150 □ 114.450 近江屋 ★
5	○	木屋九兵衛	室町二丁目家持	○	林九兵衛	日本橋区室町式丁目 12 番地	○	○	△ 118.280 □ 47.130 兼小問物 名木指物新製美術品類 木屋本店 ★
6					永田勘助	日本橋区橘町三丁目 1 番地			△ 144.000 □ 79.240 漆器蒔絵 貴金属彫刻 木屋本店
7					加藤安五郎	京橋区南伝馬町二丁目 8 番地	○	○	△ 22.830 □ 3.270 松本屋
8					山本源助	芝区宮本町 8 番地			(同じ住所で 星野銀次郎 △ 10.400 □ -)
9					遠山貞吉 (遠山サダ後見人)	日本橋区北新堀町 3 番地			
10		三沢屋辰蔵 (文久元年 10 月 8 日横山町二丁目会津屋惣右衛門より譲り)	長谷川町辰五郎地借	○	近藤辰蔵	日本橋区長谷川町 20 番地		○	△ 16.500 □ 5.100 三沢屋 漆商
11					小笹平三郎	日本橋区本銀町二丁目 9 番地			
12					穂阪平兵衛	神田区通新石町 20 番地	○穂島 (マ) 平兵衛 会津屋	○	△ 11.660 □ -
13					内田久蔵	日本橋区馬喰町四丁目 12 番地	○駿河屋	○	△ 20.070 □ 3.000
14					為永喜市郎	日本橋区新材木町 18 番地	○	○為永喜一郎	△ 21.725 □ 3.500
15	(○三河屋仁兵衛) (村松町)	○	村松町家持	○	島村弥吉	日本橋区村松町 31 番地	○三河屋	○	
16					田宮清三郎	深川区佐賀町二丁目 5 番地	○	○京橋区富島町一	
17					牧田富次郎	日本橋区小網町三丁目 24 番地			
18					菱谷市次郎	日本橋区小網町四丁目 3 番地	○菱屋	○	△ 39.000 □ 10.980
19					村上宗兵衛	日本橋区元四日市町 4 番地	○三州屋	○駿河屋	△ 176.800 □ 7.160 兼木細工物商 三州屋
20					戸塚幸兵衛 (店主小澤元次郎)	日本橋区本石町二丁目 9 番地	○静岡屋	○	△ 31.600 □ 15.600 しづおかや★
21					小澤豊太郎	京橋区常盤町 2 番地			
22					古川次郎兵衛	本所相生町壺丁目 12 番地	○日光屋	○	△ 10.370 □ 5.360 日光堂
23					秋山直七	日本橋区横山町壺丁目 16 番地	○柏屋 秋山直治郎	○	△ 12.010 □ 8.270
24					高岡清兵衛	日本橋区通油町 1 番地			

出典 ①『江戸買物独案内』(十組 塗物問屋), ②「諸問屋名前帳」(仮組を除く), ③「東京市中各種問屋組合仲買人書上帳」, ⑤『日本全国商工人名録』第一版, ⑥「東京諸営業員録」, ⑦同前第二版 (日本全国商工人名録発行所, 1898 年, ★=漆器問屋 無印=漆器商 □=所得税 (円), △=営業税 (円), 以下同じ), ⑧同前第三版 (商工社, 1908 年)。

屋八名と共同で一八八両（うち二〇両を出費）、嘉永七年には単独で五〇両の上納金を幕府に納めている⁽²⁹⁾。また、明治元年一二月には、元町年寄館久兵衛より、「調達金千両并二百両」の返金の延長が申し渡されている。詳細は不明であるが、返金の延長であることから、おそらく慶応元（一八六五）年五月に幕府が江戸町人に命じた第二次長州出兵にかかわる一〇年賦の御用金であろう⁽³⁰⁾。明治三年の営業税は四八円二〇銭、所得税が三円五〇銭、明治四〇年の営業税は四八円五〇銭・所得税が六円一二銭であった（前掲表3）⁽³¹⁾。まとまった経営史料は残存していないため、断片的ではあるが、資産の概要をみていきたい。

まず不動産については、嘉永四（一八五二）年作成の「諸問屋名前帳」で居所が「青物町清助地借」（文久四（一八六四）年以降、五人組持店地借）とあるように、青物町の店舗は借地であった。居所は、文化六（一八〇九）年の「檜垣廻船積仲間」より文政二（一八一九）年刊『諸問屋名鑑』まで坂本町二丁目もしくは一丁目で、文政二年の「十組株帳」から青物町となっており⁽³²⁾、文政二年ごろに青物町に転居したと思われる。その後、明治六年の「六大区沽券地図」（東京都公文書館蔵）でも地主にはなっていないが、明治九年刊『東京各区地主名鑑』では、一〇番地で「居付地主相田邦太郎」、明治一一年刊『東京地主案内』でも一〇番地九三坪の地主が「相田国太郎」となっている。明治八年一〇月の年記がある、東京府からの土地の寸法・面積の問い合わせに対する回答の控（「青物町所持地面引合絵図」）⁽³³⁾では、所持者が「相田邦太郎」となっていることから、明治六～八年の間に店舗のあった青物町に町屋敷を取得したと思われる。この土地は、明治一二年四月に作成された一〇〇〇円の借用証文の下書では、「沽券九百四拾五円九十四銭五厘」という評価額であった⁽³⁴⁾。

店舗の詳細は不明であるが、幕末の作成と推測される奉公人の役割分担を定めた「役割之控（附規定書）」（本稿未附表）⁽³⁵⁾の段階では、奥土蔵・

内土蔵と河岸土蔵の三棟の土蔵があった。明治一二年四月に作成された七〇〇円の借用証の写では、建物を抵当としており、付された図（図3）から、表に面して瓦を葺き、奥側は柿葺で一部を平屋とする間口四間・三〇坪の二階屋の店舗一棟を土地の間口四間四夕にいっぱい建て、さらに奥に一二坪の土蔵一棟を設けていたことが確認できる。

また、横浜の店舗は、他の江戸塗物問屋九人とともに、横浜町五丁目の大通に面した所に outlet したが、これは江戸塗物問屋の拝借地であった⁽³⁷⁾。明治一二年五月には、横浜本町一丁目一二番地一八番寄留で、万代町一丁目二番地官地拝借地の土蔵一カ所（梁間二間半・桁行六間）を金一〇〇〇円の借金の抵当としており、移転かもしれないが、拝借地があったことがわかる⁽³⁸⁾。

このほか、『東京地主細覧 二』（明治六年一二月刊 国立国会図書館蔵）によれば、第一大区十一小区神田鍋町の一二番地の所持者が「六小区青物町十五一住」（原文ママ）となっており、店舗とは別に、町屋敷一筆の所持が確認できる。会津屋文書には、時期不詳ではあるが近世期の同町の町屋敷絵図があり、近世段階から所持していたと思われる。同

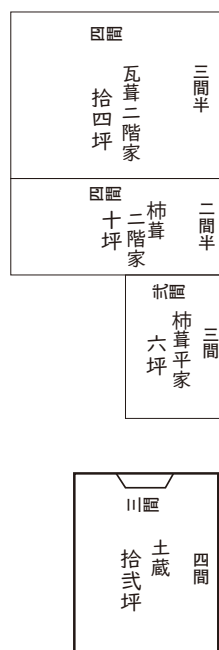


図3 会津屋徳兵衛の青物町店舗図
（明治12（1879）年7-14-10-9より作成）

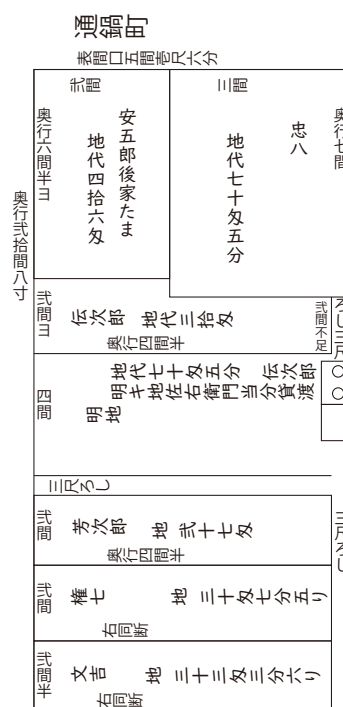


図4 会津屋の通鍋町抱屋敷図
(年不詳 6-18より作成)

絵図(図4)によれば、間口五間一尺六分・奥行二〇間八寸の角屋敷で、借家は地借七軒の総地借であった。⁽³⁹⁾会津屋は近世期から同屋敷において、町屋敷経営を行っていたと考えられる。このほか、幕末から明治初年にかけての「水谷町家作店賃取立」の書上があるが、詳細は不明である。⁽⁴⁰⁾

また、場末には、「預り人庄次郎」に貸している「市ヶ谷床」の「建家壱カ所 間口三間半 奥行四間 但し奥建具造作 庭木石一式」を担保に金七〇両を借用しており、市ヶ谷に床店を所持していたことが判明する。⁽⁴¹⁾

さらに、本石町十軒店の雛市において、仮設店舗である出小屋の権利を所持していた。⁽⁴²⁾ただし、背景は不明だが、天保九(一八三八)年に、この出小屋のシステムが変わり、本石町十軒店の月行事が、会津屋から間口九尺・奥行一間の出小屋一ヶ所の権利を金七両で買い取り、以後は町に毎年金一両二分に払い、町が設置する出小屋を借りる形となっている。⁽⁴³⁾雛人形の道具には漆器も含まれており、取引関係から入手に至った可能性が高い。塗物問屋を兼ねる雛人形問屋も存在したが、この出小屋

を実際に会津屋が使用したか、別の者に貸したかは不明である。

3 塗物以外の商売

会津屋の経営は、漆物問屋が本業であるが、元治元(一八六四)年三月に本銀町一丁目家持の大黒屋平兵衛より暦問屋株を取得し、近代に入っても暦の販売を行っている。明治九(一八七六)年にかけて「写真暦」や「勢州暦」などの代金計三九二両を、旧暦師たちが結成した頒暦商社に支払っており、同年に頒布された「太陽略歴」の奥付で「東京 弘暦者 相田徳兵衛」が確認できる。⁽⁴⁴⁾会津屋がいつまで頒暦にかかわったかは不明であるが、明治十六年暦から伊勢神宮司庁から官暦が刊行されることになり、当初は旧頒暦商社員で結成した林組に製造を依頼していたが、その後神宮司庁独自で製造することになったため、遅くともこうした変更までには頒布をやめていたと推測される。

また、天保一三(一八四二)年三月には、美濃の竹皮の荷物の仕切り代金の支払いが滞ったことや、安政六(一八五九)年一月には金二〇〇両を支払って彦根藩の畳表(「積下り罷有之青表」)の江戸の蔵元を伊勢屋嘉七とともにとめたことが確認できる。⁽⁴⁵⁾さらに明治一五年には、調整元の玉造亀之助が自宅で製造した化粧品六品(日にやけぬ水・つやの水・ホワイト香・しのめ・華のかをり・歌舞喜白粉)を会津屋が発売元として販売する契約を結び、明治二五年に解約している。⁽⁴⁶⁾このように、塗物以外の商品を扱う場合もあったようであるが、詳細は不明である。

こうした商売のほか、会津屋は金融活動を行った。関係が形成された経緯は不明だが、幕末に尾張藩の京都為替方を務めていた(「御館様御用途京都御為替方相田英太郎殿」)。⁽⁴⁸⁾これは名目金の運用である。尾張藩は、領分の商人や京都商人らの取引手形の決済を行う為替組機関である京都御用所を天保七(一八三六)年頃に設置し、当初は為替の決済

表 4 会津屋文書にみる尾張藩京都為替方の貸付金

	年月	借用者	借入金(金)	出典
1	安政5(1858)年10月	尾張町式丁目裏河岸吉兵衛地借嘉兵衛ほか2名	500両	5-11
2	文久2(1862)年12月	深川木場町徳太郎地借治右衛門ほか2名	40両	6-11
3	慶応2(1866)年11月	源助町勘七地借常吉ほか2名	40両	5-7, 6-1
4	慶応3年6月	二葉町亦七地借弥助ほか2名	25両	6-6, 6-9
5	慶応3年7月	元大工町藤右衛門地借吉左衛門ほか2名	40両	6-8, 6-28
6	慶応3年8月	小石川伝通院前表町茂兵衛地借八五郎ほか2名	40両	6-13
7	慶応3年12月	北嶋町和吉地借弥三郎ほか2名	30両	6-17
8	明治元(1868)年10月	麹町五丁目喜右衛門地借吉三郎	50両	6-15, 6-16
①	文久元年4月	織田撰津守(大和国芝村藩主)領分大和国式上郡江包村庄屋基次郎ほか5名	300両	5-12, 6-10
②	慶応3年10月	藤方信橘(600石)知行所武州埼玉郡新井村名主祐蔵ほか(八ヶ村)	100両	6-24, 6-27
③	慶応4年3月	五嶋銑之丞(交代寄合 3000石)領分肥前国松浦郡田尾村名主磯右衛門ほか2名	300両	6-19
④	—	(地頭大井栄之丞(700石)か)公務入用二付私共4ヶ村引請金275両(上総国長柄郡針谷村ほか)	275両	6-4

が目的だったところから、やがて為替御用金を名目にした貸付に主眼を置くようになった。江戸より上方へ送る産物代も、江戸の屋敷において為替取組の名目で貸付を行った。この名目金の特徴は、藩の直接の貸し付けではなく、御用所と借用主の相対貸付にあった。御用所を運営する商人や資本参加した立入人が、名目料として貸付額から一定の割合を藩に上納し、損失が生じた場合は彼らが負担したという⁴⁹。会津屋は江戸の役所の運営にかかわったと考えられる。関連する文書はいずれも幕末の二五点で、うち一八点一二件は返済が済んで効力を抹消された借用証文であった(「奉預り御金手形之事」ほか 表4)。一二件のうち八件は

「家業要用二付」といった理由による江戸市中の商人の借用で、大半は金五〇両以下である(1〜8)。残る四件(①〜④)は、「織田撰津守公務入用金」「地頭藤方倍橘公務入用」といった大名・旗本のための借財を知行地の名主が願ひ出ているもので、借用高も高額であった。②は村の郷蔵の米と畑年貢、ほかは年貢米を担保としている⁵⁰。

このほか、万延二(一八六一)年正月の日付で「南部家筋」として「深川御貸付所」が会津屋に「金三百九拾貳両」を「無利息十ヶ年賦」で「預」けた證文と、「元紀州様」として「百両」と、天保一二(一八四一)年八月より翌年一二月までの月五四両の「利息滞り 金参百貳拾七両に歩・銀六匁」を合わせた「金四百二拾七両貳歩ト銀六匁」を申告した「天保十三寅年八月證文」の写が遺されている⁵¹。両者はともに一紙に写されていることから、会津屋が借用したものである。これらも南部家(盛岡藩もしくは八戸藩)、紀州藩の名目金の運用と思われる⁵²。

4 奉公人

次に、会津屋の経営を支えた奉公人についてみておきたい。まず、年不詳ながら近世のものと思われる「役割之控(附規定書)」「(七―八)を検討する(本稿末付表)。同史料は「諸役改革」(1)、すなわち奉公人の業務の改革に伴って作成された史料と推測される。新七が万延元(一八六〇)年に暇を取った者(次掲表5―2)と同一人物であれば、それ以前の作成となろう。

まず付表16「下働」は氏名が示されておらず、台所の食事の仕度や外の掃除といった職務から考えて奥の奉公人で、1〜15が表の奉公人と考えられる。

計一五名の付表の奉公人のうち10〜15は「諸方使」と掃除などを行うことから、最も下の階梯である。ただし、10は河岸土蔵の手伝いで売場にかかわったり(6)、店の二階・三階の片付けを担当していることから、

表5 近世・近代の会津屋の奉公人

	奉公人名	請状差出年月日	出身	年齢ほか	請人ほか	種別	期間	給金	備考	出典	史料名
	1 安兵衛	弘化3(1846)年10月			請人:本両替町家主清八 人主:行徳河原升屋文右衛門					6-48	入置申一札之事 (御店奉公安兵衛引負金割済延引申訳無 此度対談取極相納につき)
	2 新七	万延元(1860)年3月			麹町十二町目清兵衛店政五郎					6-44	引取申一札之事 (新七義御暇開済被下 当人衣類等不残受取につき)
	3 三之助	慶応元(1865)年5月			請人:浅草茅町式丁目 家主利兵衛 人主:同所同町家主源八 日蓮宗浅草橋場妙高寺旦那	年季奉公	当丑五月 申五月	「年季中金壹両」 「年両度之御四(仕)着世被下」	明治11年1月25日に引取「雑品不残」金式円七拾五銭」お渡し引取人は神田淡路町式丁目松村国蔵(6-57-2)	6-57-6	奉公人請状之事 (三之助給金年季中金1両につき)
	4 角次郎	明治5(1872)年3月1日			請人: 日本橋長浜町壹丁目番地所 中村源八 人主: 北精町八番地所 中村福太郎 三田小山東光寺旦那	年季奉公	当申三月 来巳三月	「年季中金壹歩」 「歳両度之仕着施被下」		6-57-5	奉公人請状之事 (角次郎給金年季中金1両につき)
	5 藤吉	明治9(1876)年10月18日	「年来御店様御厚情ヲ以」		請人: 第一大区七小区中橋広小路町十一番地 比留間彦右衛門 人主: 同大区同小区同町四番地 比留間清次郎	召仕			横浜店	6-57-7	奉公人請証之事 (藤吉横浜御店ニ而召仕につき)
	6 石川由之助	明治11(1878)年7月13日	神奈川県管下相模国高座郡藤沢大久保町拾壹番地平民石川専助長男	慶応2 寅年 2月3日生	第一大区拾壹小区 神田柳町壹番地 登村留次郎	漆器渡世 修行雇人		夏冬両度御仕着被下約定		6-57-3	雇人請状之事 (神奈川県藤沢大久保町石川由之助貴殿方へ漆器渡世修行につき)
	7 高畑西助	明治11(1878)年10月	福島県下岩代国第十一大区会津郡若松融通寺町八十三番地土族高畑申兵衛倅長男	18年	第壹大区六小区上横町十番地 山口庄三郎	漆器渡世 修行雇人		夏冬両度御仕着被下約定		6-57-4	雇人受状之事 (福島県若松融通寺町高畑西助貴殿方へ漆器渡世修業につき)
	8 飯田嘉太郎	明治12(1879)年6月10日	千葉県下安房国安房郡川名村五番地飯田新兵衛三男		赤坂区榎坂町二番地所 吉田儀平	漆器渡世 修行雇人	12年6月)	夏冬両度御仕着被下約定		6-57-1	雇人請状之事 (千葉県川名村飯田嘉太郎貴殿方へ漆器渡世修行につき)
	9 吉次郎	(明治16<1883>年6月)	日本橋区浜町三丁目壹番地木納吉右衛門の倅			雇人			再び雇用の願 吉右衛門は相田家に借金あり	6-56-3	差入申證書 (金15円)
	9' ひさ	明治14(1881)年5月	日本橋区浜町三丁目壹番地木納吉右衛門の娘		※保証人 日本橋区蛸殻町宅町目三番地 長浜峯治郎	雇人			雇用継続の礼(明治16年12月)吉右衛門は相田家に借金あり	6-54-4	証 (前書合金40円借用につき)
①	久保まさ	明治10(1877)年11月20日	千葉県管下安房国長狭郡門場村平民久保忠蔵次女	21年 1ヶ月	東京府下第一大区十小区南八町堀三丁目六番地 久保たま (まさの「縁者」)	雇人	10年11月 11年3月	1カ年7円		5-8	雇人請状之事 (久保まさ給金7円につき)
②	嶋津ぶん	明治11(1878)年4月26日	千葉県管下安房国長狭郡門場村平民嶋津新作長女	19年 3ヶ月	東京府下第一大区十小区南八町堀三丁目六番地 船越章熙	雇人	11年4月 12年4月	1カ年6円		5-9	雇人請状之事 (嶋津ぶん給金6円につき)

その階梯の最上級の者であろう。

4・9は、「売場」にかかわる奉公人で、8・9は買い手が決まった商品の梱包（荷物作り方）など売場の手伝い、4・5の売場支配と6・7の売場が実際の販売にかかわったと考えられる。

1・3は「帳場」にかかわる者で、4・5の売場支配の者も交代で職務を分担した。その内容は、帳簿の計算（「勘定」「帳合」と商品の管理（土蔵の改め、施錠の確認など）、店内や出入の規律の維持（奉公人の起床時間、職人の出入り）であった。

実際の奉公人の供給システムについては不明であるが、表5に主に奉公人請状から近世・近代の奉公人の出自の情報を整理した。①・②は奥の奉公人で、給金は年払いで「雇人」という呼称になっている。両者とも安房国が実家であり、請人は異なるものの、下女の供給源の一つであったことがうかがわれる。一方、表5-1・9は表の奉公人で、年に二回の「仕着」を受け取る定めで、「年季奉公」もしくは「漆器渡世修行雇人」となっている。このうち5は横浜店の奉公人であった。士族ながら漆器生産地の会津若松の者もあり（7）、会津屋と関係する可能性のある5・9など、実家が漆器業で修行にきている可能性もあろう。なお、別家については不明であるが、栃木県佐野市出身の新井清太郎は、千葉県香取郡滑川村を経て明治一四（一八八二）年三月に横浜店に入店したのち、西欧人の商館勤務を経て商社を設立している。⁵³⁾

5 漆物問屋の経営

（一）概要

では、前項で検討した「役割之控（附規定書）」（付表）を参照しながら、断片的ではあるが、明治期を中心に漆器の取引をみておきたい。

まず、近代の取扱商品については、青物町で営業していた段階の二点の引札からうかがうことができる。図5（本稿末参照）には、「諸国ぬり

物 おろし 小うり」とあることから、前章でみた江戸問屋の業態と同様に、卸と小売りを兼業していたことが確認でき、よく吟味した「上品」を「廉価ニ販売」するとしている。

描かれている商品は、膳、重、椀、「会席膳」、煙草盆、衣紋掛、三方、鏡箱、行灯・燭台など灯火具、算盤など、前章でみたように多様化した漆器をひろく取り扱っていたことがうかがわれる。商品の詳細がわかる帳簿は断片的にしか残存していないが、たとえば箸について、「丸」「永」（長い）などの形状のほか、「弁」（弁柄拭き漆）といった加工などさまざまなものがみられ、また重、膳、弁当箱なども多様な商品を扱っていたことがうかがえる（表6）。また引札によれば、「新規御誂之品」を「入念下直ニ出来」と注文制作を行っていたようで、とくに「木杯類各種調進」とうたっていることから、配り物の盃への名入れ・紋入れの注文にも応じていたようである。

英文で記された図6（本稿末参照）は、商品はすべて船便で安全に送れるとすると、商品（All goods carefully packed and shipped.）⁵⁴⁾来日した外国人の土産を意識した宣伝となっている（Visitors to Japan are cordially invited to inspect the store.）。「漆器蒔絵物数品」とあるように、金蒔絵（gold lacquer）のシガレットケース（cigar cases）、ハンカチ入れ

表6 近代の取り扱い商品の例

松坂箸さし類品々	黄皮付よふし 850 膳、浅取頭丸弁 1070 膳、同断永 1660 膳、朱頭丸弁 1600 膳、同断丸永 160 膳、黄頭丸永はし 1400 膳、同貝成弁 1000 膳、同永 100 膳、朱貝成弁 550 膳、同断永 2900 膳、黄両細やべ 3460 膳
勢州山田物品々	春慶壺ばん角切灯明足膳 35 枚、同断式ばん 59 枚、同断九寸角立くるみ足膳 42 枚、同断一尺角立同断 76 枚、同重替少々取合 30 枚、同七寸替少々 18 枚、同七五 16 枚、同八式 8 枚、同五寸五分四段重替り少々二付 14 組、同六寸四段重裏白式少々フツカケコ 1 組、同断裏塗同断 16 組
不明（抄録、点数省略）	黒内朱小組入弁当、黒内朱五段弁当重、のしろ（能代）内黒七寸三ツ枳重、春慶尺七寸肴箱、同尺八寸箱膳、同見舞重大形、同壱尺鉢台、同無頭茶船、春慶六寸五分湯桶、同八ばん飯次、蛸花八ばん飯次、春慶七寸五分五ツ入る切溜、春慶七寸三宝、総黒塗ひつ

（年不詳 4-6「（勢州山田物類品々・松坂箸さし類品々書上帳）」より作成）

(handkerchief boxes)、手袋入れ (glove boxes) をはじめとするあらゆる箱、木製の盆 (wooden trays) を商品としてあげ、日本趣味の調度を意識した絵では、三方と三つ組みの酒杯、文箱、提重、違い棚、棗などが描かれている。このように、近代の会津屋は外国人向けの商品も扱っていた。

(2) 仕入

では、仕入をみよう。江戸塗物問屋の仕入は、嘉永四(一八五二)年の仲間の「規定書」で「諸国出産之塗物類」「諸国塗物荷主」とあるように、諸国から行っていた。半田は黒江屋の仕入れ先を、①上方市場(京都本店・大坂)、②生産地(会津・日光・駿河・紀伊・尾張・伊勢・近江・木曾・箱根)、③江戸での買入れ・注文生産(地買物・地職人)に分けて検討した。そして、開店当初の安永四(一七七五)年は①六三・八%、②三〇・七%、③五・五%であったが、天明期以降、①が後退し、弘化三(一八四六)年には、②の大坂を介さない生産地からの直接の仕入れが五六%、③江戸二六%、①上方一七%と割合が逆転するとしている。

会津屋の仕入れについても、引札以前の近世段階より、諸国から行われていた。「役割之控(附規定書)」(本稿未付表)には、「諸国注文」と「地物仕入方」があり、さらに「会津荷物」が「諸国注文」とは別記されている。会津の仕入れが別記されているのは、おそらく仕入れの中核だったからであろう。また、「セリ物」「セリ帳」とは、市場での競りによる仕入れと思われ、会津漆器については会津藩の産物会所が想定されるが、詳細は不明である。

会津屋の明治一二年段階の「地物」とは、「東京・横浜又ハ相州小田原最寄ニテ製造仕出シ塗器ヲシテ之ヲ地物ト唱フ」と、東京・横浜・小田原近辺での製造品を指した。東京(江戸)のほか、横浜・小田原近辺

が「地物」となったのは、横浜が開港し、これらの地域が近接地となったためであろう。その「地物」の金額は、「老ケ年売買高凡金貳万円見込」とされている。とくに注文品では「地物」が用いられたようで、その生産は以下のような形で行われた。

(前略) 地物製造方ノ義ハ従前日限ヲ定メ、注文品確定スルニ臨、該代価ノ二分通製人^江貸渡シ、日限中バニ至リ、尚二分通貸渡、品物出来持込ノ上、尚三分通相渡、残り三分ハ商館ヨリ収入次第皆済仕来リ(後略)

注文が確定してから価格の二割を、制作半ばでさらに二割を前貸しし、商品が納品されてから三割を渡し、商館から代金を受け取ったに残る三割を払う、といった形で生産者に前貸しを行い、生産をすすめたのである。

具体的な仕入先的一端がうかがえる史料として、明治二〇年六月の未払い分の書上(「各荷主負債」)⁽³⁵⁾がある。表7は、『日本全国商工人名録』明治二五年版から情報を補ったものである。『日本全国商工人名録』で確認できたのは九人であるが、いずれも漆器の製造ないし販売を行う者たちであった。ちなみに輪島の松屋伊兵衛は、『日本全国商工人名録』で「明治十年同十四年内国勸業大博覧会ニ際シ退福社ノ名ヲ以テ出品シ、鳳紋賞牌及有功二等賞、同廿三年第三回同勸業大博覧会ニ出品有功三等賞ヲ賜ハリタリ」とその技術を宣伝している。^(マ)

全体では三二名で、うち会津若松が一名で三分の一を占める。次いで、京都が五人、静岡が三人、以下、伊勢・小田原・木曾が各二人、大阪・紀州黒江村・日光・輪島・名古屋が各一人、不明が二人であった。さきの区分では、小田原のみが「地物」で、ほかは「諸国」となる。金額については、負債金で一〇〇円を越えているのは、紀州の川端が九〇〇円、静岡の枅屋が五七〇円、日光の星野が一八五円、会津若松の菊地が一〇〇円で、地域ごとで見ると紀州(九〇〇円)、静岡(五八一円)、

表 7 諸国の仕入先 (明治 20 年 6 月)

居所	人名	負債額(円・銭・厘)	『日本全国商工人名録』 (明治 25 年版)
若松	川瀬定吉	60.00.0	
若松	高瀬喜右衛門	85.00.0	漆器卸小売商 七日町 白木屋 ※所得金 1000 ～ 2500 円
若松	満山長左衛門	30.00.0	
若松	武藤徳兵衛	20.00.0	
若松	赤城豊吉	31.00.0	
若松	谷半兵衛	35.00.0	漆器卸商 大町一ノ町 丸角屋
若松	篠崎宇兵衛	70.00.0	
若松	菊地俊次	100.00.0	漆器卸小売商 若松町 清澄屋
若松	鈴木善治郎	56.00.0	漆器卸小売商 七日町
若松	鈴木久助	9.00.0	
若松	鈴木幸蔵	20.00.0	
西京	吉野屋治兵衛	5.13.3	
西京	大和屋惣兵衛	8.78.0	
西京	笹屋喜助	60.22.1	
西京	美濃屋孫兵衛	37.62.6	漆器卸商 美濃屋 稲垣孫兵衛 寺町通四条上ル
静岡	永倉兵右衛門	20.00.0	内外適用漆器卸商 静岡市 札ノ辻
静岡	枅屋□助	570.13.3	
静岡	市川周吉	9.55.0	
小田原	渡部助右衛門	26.13.0	
小田原	油屋勘兵衛	21.50.0	
木曾	百瀬治兵衛	12.60.0	
木曾	松野屋□□	25.50.0	
伊勢	片岡吉兵衛	10.00.0	
伊勢	橋本佐兵衛	30.45.6	漆器商 宇治山田町 岡木町
大阪	黒川屋七三郎	37.62.6	
紀州	川端六左衛門	900.00.0	国産貿易漆器卸商 黒江村
輪しま	松屋伊兵衛	14.56.0	全国付着無類漆器製造并販売 松井伊平 輪島町
名古屋	扇屋治助	76.15.0	
日光	星野七兵衛	185.96.0	
日光	森川治作	7.50.0	
□□	大沢重次郎	3.04.0	
合計		2581.13.3	

会津若松(五一六円)となっていた。第一章で確認した漆器の産地が仕入先であったことが確認できるが、この書上の限りでは、黒江屋と同じく、石川県からの仕入れが少なく、会津若松の取引相手が多かったようである。ただし、京都に本店がある黒江屋とは異なり、上方(京都・大阪)への依存は当初から弱かった可能性がある。

また、次頁の表 8 は明治四二年六月から明治四三年六月の支払いの帳簿より、人名を抽出したものである。⁽⁵⁶⁾印文から居所が読み取れる者については居所を記し、さらに『日本全国商工人名録』第三版(明治四〇年)より情報を補った。三八名のうち、五人は地方の漆商で、会津若松二名、静岡・輪島・箱根各一名であるが、明治二〇年段階で借財のあった荷主とは一致しない。また、一三名は東京の者で「地物」にあたる。職人のほか、会津屋と同じ問屋もみられるが、会津屋は小売も行っていたことから、売方と買方の仲買の機能も有していたと考えておきたい。⁽⁵⁷⁾

(3) 販売

一方、販売については、幕末の「役割之控(附規定書)」(本稿未付表)によれば、「屋敷向」、「下タ町掛廻り」、「山之手掛廻り」、「田舎出し荷物」という表記から、屋敷向(＝武

表8 仕入先(明治42年6月～43年6月)

人名	居所	『日本全国商工人名録』第三版(明治40年)/第五版(大正3年)△=営業税(円) ○=所得税(円)	4-13「払」
山田嘉藤次分	岩城若松		
篠崎宇兵衛	(若松)	△12.600 ○3.060 (若松町) 桂林寺町 /第五版 △36.02 ○22.68	
野呂七之助		△13.559 静岡市本通二丁目	
能州 輪島 杵崎寿平		/第五版 △31.84 ○8.10 輪島町	
細川定吉		/第五版 漆器商 箱根産物漆器卸商 挽物屋 創業五年 相模国箱根温泉村大平台	
金子清太郎 (箱清)	日本橋元大工町四番地 指清	指物商 △11.400 ○3.000	
小林(近江屋) 藤右衛門	きん藤 小林商店(通二ノ一八)	漆器商 △116.000 ○199.870	○
分	太田商店 金(新材木町一一)	漆器商 太田屋万吉 △45.000 ○6.000	○
木村平右衛門	(本材木町一ノ一一)	漆器商兼蠟燭 △87.000 ○3.000	○
府川五郎吉 (常吉)	小伝馬町二丁目	漆器商 △31.500 ○40.050	○
岡田利吉	各国漆器問屋(通一ノ七)	漆器商 △10.700 ○3.000	○
富永吉右衛門	日本橋□(佐カ)内町岡崎屋		○
高倉亀三郎	高砂町塗師金		△高倉金次郎
村上宗兵衛	日本橋区元四日市二番地 漆器指物雑貨問屋		○
二宮喜三(蔵)	漆器問屋		
大坂や市右衛門	室町三丁目四番地		○
橋本久吉	日本橋区堀江町式丁目一番地 橋本商店		
高□□	馬喰町		
高木商店		高木蔵三 △19050 ○27810 神田区一ツ橋通6カ	○
木屋本店	日本橋区室町一		○(林久兵衛)
岩田久七			
竹岡喜兵衛			
田中や佐蔵			
佐藤恒吉			
鳥海源治郎			
西岡幸俊			
五十嵐藤吉			
西宮平右衛門			○
泰吉兵衛			
飯森勝太郎			
多田□八郎			
福山			福山庄三郎カ
爲永			為永喜右衛門カ
大野屋 柴垣			大野藤吉カ
如意堂 石井			石井辰三カ
坂本店			

(4-5「記(金銭受取簿)」より作成)

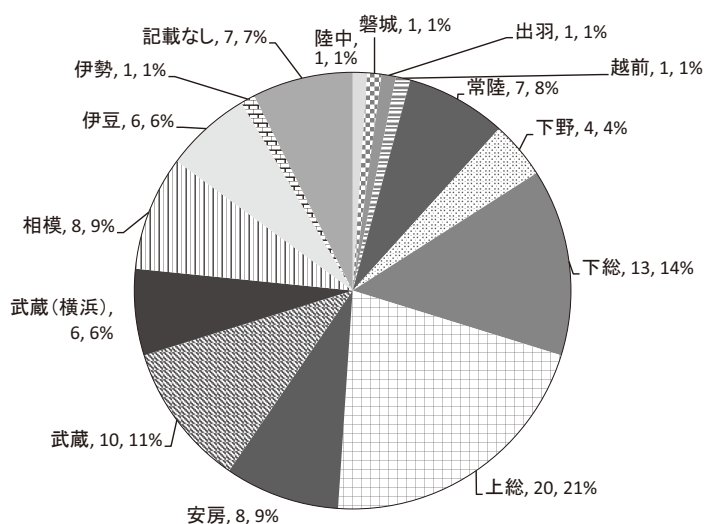
家地)、下町、山の手、田舎出しの四通りがあったと考えられる。近世の黒江屋については、江戸市内が対象であったが、会津屋は近世から地方販売を行っていたのである。なお、下町、山の手については、地域の表記とすれば寺社も含んだ可能性があらう。

具体的な販売先がわかる史料も少ないが、江戸で判明する売り先として、雛屋三番組(慶応二年六月より雛屋一番組仮組)の伊勢屋武兵衛が確認できる。伊勢屋が会津屋に出した文政一一(一八二八)年の證文によれば、伊勢屋は会津屋から「仕入物代金之義一節季送り勘定」を許される関係であった。さらに、本郷弓町の店舗が「近來現金商内不景氣にて減少」のところ、会津屋の仲介で池之端仲町の大槌屋の家・土蔵を金一一〇両で買い取り、本郷の店舗が売れるまで、普請や弘め入用金一二〇両と合わせて二三〇両を会津屋から三〇両一步の利息で借用し、加えて新たに金一〇〇両分の商品を無利息で先渡ししてもらった。こうしたことから、「子孫ニ至り候共直仕入者勿論、外方ニ而仕入物等聊たり共仕問敷」と、今後会津屋からのみの仕入れを誓っている。先にみたように、会津屋は十軒町の雛市の出小屋の権利を持ち、家・土蔵の売買を仲介した大槌屋も文政二・七(一八一九―一八二四)年に茅町組雛人形手遊問屋の株を有しており、⁽⁵⁹⁾会津屋と関係があった可能性が高い。したがって、会津屋は、伊勢屋のみならず雛人形商売の者も得意先としていたと考えられる。雛問屋の中でも二番組・三番組は季節物の商売を兼業する零細な者が多いが、伊勢屋は後に一番組の仮組に加入していることから、比較的有力な者だったのであらう。また、こうした得意に便宜を図り、より強固な関係を結んでいる点も注目される。

田舎出し荷物については、明治四一年一月二五日から同四二年五月一八日までの輸送業者の受取証の綴りの地方発送分「(荷物請取簿)」(四―四)が、該当すると思われる。⁽⁶⁰⁾所載された全九六件を旧国名ごとにしたもののが図7である。あくまで運輸業者に依頼した遠方の荷物であ

り、その商品の内容も不明であるが、以下、検討したい。
まず、対象範囲は陸中より伊勢までとなるが、大半は関東で、全体の八二パーセントを占める。とくに下総・上総・安房が四四パーセントを占めた。輸送手段の問題なども勘案しなければならないが、この時期の遠方への販売では、会津屋にとって千葉県域が重要であったことがうかがわれる。また、表9には、送り先の職種等について、『日本全国商工人名録』第三版(明治四〇年)・第五版(大正三年)より情報を補えた者をあげた。判明したのは二五件で、全体の約四分の一である。このう

図7 会津屋の地方販売先



[明治41～42年 4-4「(荷物請取簿)」より作成]

表 9 会津屋の地方販売先

(明治 40 年 12 月～ 41 年 11 月)

地域	日付	品目	住所	氏名	『日本全国商工人名録』第三版 / 第五版ほか △=営業税 (円) ○=所得税 (円) 営業税 25 円以上 /10 円以上	運送者 (※荷揚場)
陸中	19090320	漆器入箱 荷物壹箇	陸中國宮古港	鈴木 長兵衛	△ 33.630 ○ 28.450 回漕業委託販売業木材業 房州屋 宮古湊鉄ヶ崎町 / △ 106.54 ○ 81.37 運送業・木材業・ 委託販売業	北海廻送店
常陸	19081112	漆器箱入壹個	茨城県新治郡 石岡町	青柳 新兵衛	△ 287.64 ○ 553.32 米雑穀肥料商 官塩元売捌所	蛸殻町㊟ (両国通運力)
	19090304	漆器入箱物壹個	茨城県稲敷郡 木原町	小沢 熊五郎	△ 50.15 ○ 18.35 米穀肥料商	常陸屋 (小網町三 常磐屋□治郎)
	19080408	漆器箱入荷物 壹個	茨城県水海道町	野々村 源四郎	△ 245.11 ○ 404.28 釜屋 肥料商	両国通運会社
	19081101	*取消 漆器入 □荷物 貳個	常州石岡	浜平右衛門	△ 351.15 ○ 752.40 小川屋 醤油醸造味噌製造, 石油, 度量衡器販売「賞状, 内外金牌数回受領」	上野停車場前 三立社支店
	19080921	塗物入中箱荷 物壹個	茨城県稲敷郡 江戸崎町	藤井 政次郎	△ 31.57 ○ 8.26 料理屋業	両国通運丸 ※平川 金沢へ揚ヶ
下野	19081211	漆器箱入壹個	栃木県上都賀 郡鹿沼町鹿沼 駅上ル丁	金子文弥	△ 39.00 ○ 48.99 米雑穀商	三運送店
下総	19080802	漆器わら包壹甲	千葉県匝瑳郡 本陽村宮川	大木 傳兵衛	△ 16.050 ○ 9.970 大木伊兵衛 匝瑳郡福岡町 陶器漆器 商／－	運送店 (合名会社両国運送店) ※下サ八日市村㊟揚
	19081222	漆器入箱荷物 壹個	千葉県千葉郡 幕張町	入江 重右衛門	△ 31.700 ○ 79.540 幕張町 醤油製造業／△ 130.47 ○ 159.78 入江重右衛門 幕張町 醤油醸造業	三池運送店 (両国橋際停車場前)
	19090110	漆器入箱荷物 壹個	下サ寒川	深山伝六	△ 11.360 ○ 7.500 千葉町 穀物・薪炭商／△ 30.26 ◎ 21.52 千葉町 米穀商	東京湾出張所
	19081127	漆器入箱荷物 壹個	下サ毛見川町	藤代 伊勢吉	※藤代音次郎 △ 19.450 ○ 6.780 検見川町 荒物商・石炭商／藤代音五郎 △ 33.57 ○ 32.54 検見川 町 荒物商	千葉舎
上総	19081107	漆器入中箱荷物 壹個	上サ君津郡港町	小幡 孫兵衛	△ 17.450 ○ 19.720 醤油醸造業／△ 45.94 ○ 38.23 醤油醸造業	共同汽船扱 (泰廻送店を抹消)
	19080808	漆器箱入壹個	上サ長者町 (夷隅郡)	清水屋 伴助	(4-10 にあり)	三池運送店 (両国橋際停車場前)
	19081219	漆器入中箱 荷物壹個	上サ香取郡 笹々川町	土屋 善兵衛	旅人宿 △ 12.200 ○ 6.230 / 運送業 土屋善兵衛 笹川町 須賀山 △ 36.70 ○ 18.55	小泉運送店 (本所区横網町一丁目) ※「元払 五拾銭」
	19081020	塗物入箱荷物 貳個	上サ豊浜村川津 (夷隅郡)	渡辺五郎 (ママ) 左 衛門	「文化 7 (1810) 年, 五郎右衛門は先祖伝来の当村鯨ヶ浦 の網長屋・干鰯場を六郎兵衛に年金九両 (うち運上金二 両) で貸したところ滞納がちで, 催促にも応じないとして 訴訟に及んでいる (渡辺家文書)。同九年対清国輸出品で ある干鰯五千二百〇〇斤の生産を幕府に請負っているが, こ れは請負三九ヶ村のなかで最大であった」[[千葉県地名] 平凡社, 1996 年]。	泰廻送店
安房	19090224	漆器箱入貳個	房州千倉	大野 三治郎	△ 12.200 ○ 6.010 安房郡磯町 呉服太物 大野三次郎／ △ 56.70 ◎ 24.26 東房織布商会 大野三次郎安房郡磯町 千倉 創業明治十五年 明治四十四年 皇太子殿下御買上 ノ栄ヲ賜フ	□橋際 鈴木廻送店
	19080303	漆器小箱入物 壹箇	房州白子	志村 松太郎	△ 10.020 ○ - 魚類商 志村松太郎 房郡千歳村／－	東京湾汽船会社
	19080724	漆器箱入壹個	房州館山	長井 文治郎	△ 13.800 ○ 4.230 乾物青物洋酒罐詰紙砂糖類 大黒 屋 海軍糧食品請負人 長井文治郎 館山町／△ 45.40 ○ 21.73 乾物青物洋酒罐詰砂糖紙類商 大黒屋 長井文治 郎 館山町 電話 43	共同荷扱所 (東京湾汽船会社)
武蔵	19081218	漆器入箱荷物 参個	武州八王子	高尾山	高尾山	芝愛宕高尾山出張所
	19090409	漆器小箱入壹個	埼玉県菖蒲町	森沢代吉	△ 114.57 ○ 63.24 呉服太物商	両国 三池運送店
相模	19081219	黒足付膳五枚 新聞紙包	横須賀	岩本	(△ 215.88 ○ 182.49 若松町酒類商 岩本七蔵 カ)	源右門舟 (相州)
	19081122	漆器入中箱荷物 壹個	相州三浦郡 浦賀町宮ノ下	加藤 小兵衛	△ 350.10 ○ 358.20 酒醸造販売／西浦賀 淡路屋 米穀酒類食塩問屋 [吉村雅美「明治期西浦賀における問 屋の経常の変遷」『歴史地理学調査報告』12, 2006 年]	共同 (東京湾汽船会社)
	19080925	漆器中箱荷物 壹箇	相州横須賀 稲岡	新野 回送店	海陸運送業 新野捨次郎	共同荷扱所 (東京湾汽船会社)
伊豆	19080325	漆器入小箱壹ヶ	伊豆下田	白井	(△ 108.9 □ ○ 97.25 米穀肥料商 白井安之助 カ)	近藤 (京橋区本湊町 近藤廻送店)
	19080822	漆器入荷物 四個	伊豆田方郡 伊東町	東京館	(東郷平八郎が逗留した温泉旅館)	東京湾汽船会社 ※猪戸川西揚

ち運送業の陸中宮古の鈴木長兵衛と相模の新野回送店、陶器漆器商の下総の太木傳兵衛がさらに他の顧客に輸送ないし販売した可能性が、また料理屋業である常陸の藤井政次郎や武蔵の高尾山、伊豆の旅館である東京館、安房豊田村役場が業務で使用した可能性があるが、その他の購入者は自家用であろう。わざわざ東京の問屋から送らせていることから考えて、おそらく接客や儀礼などで用いる高級品と考えられる。

このほか、会津屋は東京勸工会社の陳列場に商品を出品していた。東京勸工会社とは、殖産興業の一環として明治一〇年八月より一月まで上野公園で開催された第一回内国勸業博覧会の売残品を東京府が麹町辰ノ口評定所跡で展示販売した物品陳列所の後裔である。明治一〇年一月に勸工場と改称し、明治一三年六月からは出品人の出費による運営となった。近衛監督部からの返地要請によって明治二〇年四月にいったん上野公園に仮移転した後、翌年五月に芝公園内で新規に開場したが、これにともなって東京勸工会社が同年一月に認可された。明治二〇年の二六品目の売上高三九六二〇円三七銭のうち漆器類は二六〇五円五九銭で全体の六・六%、販売個数は一九〇四八九点のうち六六八五点で三・五%であった。⁽⁶¹⁾ 会津屋は、第一回内国博覧会で古漆器を展示販売した。⁽⁶²⁾ その後、明治二二年三月に「出品物看護」の契約を結んでいることから、遅くとも会社設立直後には参加していたと考えられる。⁽⁶³⁾ 年不詳の帳簿の断簡には「東京勸工会社売上高」の記載があり、取引も確認できるが、⁽⁶⁴⁾ 出品した期間は不明である。

おわりに

本稿では、近世から近代にかけての漆器生産の展開と江戸での流通を概観した上で、江戸・東京の塗物問屋の例として会津屋を検討した。

前者については、近世期に漆器が大衆化し、さまざまな器種で用いら

れたこと、また産地問屋や売り先からの「抜荷」によって、地元で流通するはずの粗悪品が江戸で大量に流通し、こうした商品も扱う店が五、六〇〇にも及んでいたことを指摘した。従来は、漆器の流通は、産地の荷主問屋と、江戸での取引を独占する江戸問屋の対立を中心に描かれてきた。しかし、産地の荷主問屋も田舎出しの仲間が抜荷をすすめるなど一枚岩ではなく、またこうした「抜荷」に実は江戸問屋自身もかわっていた。粗悪品の流通は、こうしたさまざまな利害が複雑にからんで起きた状況であり、今後丁寧な検討が必要であろう。また、実際にどのようなものが消費されたか、という視角からは、粗悪品の流通も重要なテーマである。⁽⁶⁵⁾ 今後の課題としたい。

また、後者については、まず、町屋敷や床店を所持し、漆器にとどまらない商品の取り扱いや名目金を利用した金融活動など多角的な経営を行っていたこと、奉公人は表と奥に分離し、表の奉公人については関東近郊も含む同業者からの修行という性格を持っていたことを明らかにした。町屋敷所持、積極的な金融活動、奉公人の表と奥の分離、といった諸点に鑑みて、会津屋は江戸の本店とみてよいだろう。⁽⁶⁶⁾

その上で、すでに研究のある黒江屋と比較しつつ、主に明治期の漆器商売を検討した。仕入れについては、諸国の産地、とくに会津との取引を主としながら、東京の塗物問屋や職人をはじめ、横浜・小田原近辺より「地物」を仕入れていたこと、また販売では、江戸市中とならんで近世段階から「田舎」への販売を行っていたことを明らかにした。史料的な限界はあるものの、京都の紙問屋によって居抜きされ、京都商人の江戸店となった黒江屋とは、仕入れ、販売において相違が認められる。従来の江戸商人の研究は、他国住の江戸店の分析が中心であったが、今後こうした江戸住の商人の史料の発掘と検討が課題であろう。

註

- (1) 半田市太郎『近世漆器工業の研究』（吉川弘文館、一九七〇年）。その後、北野信彦は主に生産や技法について出土遺物と文献史料を合わせて検討をすすめた（北野信彦『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣、二〇〇五年）。
 - (2) 林玲子『江戸問屋仲間の研究』御茶の水書房、一九六七年ほか。
 - (3) 一方で、近世考古学の進展により、消費地の江戸ではさまざまな漆器が検出され、事例が蓄積してきている（前掲北野『近世漆器の産業技術と構造』、『URUSHIふしぎ物語』人と漆の二二〇〇年史（国立歴史民俗博物館、二〇一七年）ほか）。また、筆者は消費地の小売までをふくめた流通を重視し（岩淵『近世考古学と近世史研究』『知多半島の歴史と現在』一八・二〇一四年）、同「江戸・東京の酒・醤油流通」（『醤油醸造業と地域の工業化』慶応義塾大学出版会、二〇一六年）、消費地内の流通という視点から銘酒の『似印酒』の流通を検討した（岩淵『江戸の醸酒』『学習院史学』五四・二〇一六年）、同「偽物をめぐる近世と近代―商標条例をめぐる―」（『まちなし』土浦市立博物館、二〇一六年）。
 - (4) 前掲半田書、第六章。なお、近年柏原家の文書については総合調査が進められており（柏原家文書研究会『京都西橋町柏原家の文書と建築』二〇一八年）、今後新たな成果が期待される。
 - (5) 文政二・天保二（一八一九・四一）年の「問屋株帳」（東京大学経済学部資料室蔵白木屋文書）ではのべ七名、幕末の「諸問屋名前帳」（国立国会図書館蔵）では仮組も含めてのべ四名である。
 - (6) 会津屋文書は、現在も営業を続ける會津屋漆器店が所蔵しており、本館名誉教授西本豊弘氏の紹介で、本館第三展示室リニューアル事業の研究資料として二〇〇〇年一〇月より二〇一四年三月まで本館で借用させていただいたものである。借用した文書は、近世五二点、近代二七点、年次不詳三四点で、近代文書、とくに明治期のものが多い。また、経営史料や家関係の史料については、現当主の先々代にあたる倍三氏の整理、調査によるものがみられる。以下、史料引用にあたっては、本館の整理時に付与した史料番号と表題を用いる。
 - (7) 江戸住商人については、岩淵「江戸住大商人の肖像」（『新しい近世史』三、新人物往来社、一九九七年）、同「大店」（『シリーズ三都』江戸巻、東京大学出版会、二〇一九年）において、論点を示した。
 - (8) 前掲半田書序章。ただし、『府県物産表』や器種等への言及はない。
 - (9) 『決定版 番付集成』柏書房、二〇〇九年、一一三頁。
 - (10) 『興業意見』については、安藤良雄・山本弘文編『興業意見他前田正名関係資料』（光生館、一九七一年）の解題、有泉貞夫「興業意見の成立」（『史学雑誌』七八・一〇、一九六九年）、祖田修「『興業意見』の政策構想―殖産興業政策と地方産業」（『龍谷大学経済経営論集』一五（三・四）、一九七六年）を参照した。
 - (11) 『明治前期財政経済史料修正』第一八巻ノ二、明治文献資料刊行会、一九六四年、四八四～五頁。
 - (12) 同前書、四五八頁。
 - (13) 明治文献資料刊行会編『明治七年 府県物産表』（明治前期産業発達史資料第一集（二）・（二）明治文献資料刊行会、一九五九年）。
 - (14) 前掲半田書。
 - (15) 以下、会津塗の江戸での流通については、会津若松の大町組の町役人であった梁田家に伝来する編纂史料を使用する。梁田家文書は福島県立博物館に寄託されており、本稿では、東京大学文学部日本史学研究室所蔵のマイクロフィルムからの紙焼き本を利用した。
 - (16) 松田暁子「天保期国産品販売をめぐる会津藩での動向について―「御国産一件」を素材として―」（『東京大学日本史学研究室紀要』第一五号、二〇一二年）。
 - (17) 「御国産一件」を（梁田家文書第四〇一号）所載。前掲松田論文では、宛先を町役所と推測している。
 - (18) 正月（天保二（一八四一）年）作成の梁田仙右衛門による仕法の提案書（御国産一件 式）（梁田家文書第一四〇号）所収。提出先は記されていないが、おそらく会津若松の町奉行であろう。
 - (19) 後掲註20「御国産捌一条二付吟味書」の「付ケ札」。ただし、この「付ケ札」の作成者は藩の関係者と思われるが、詳細は不明である。
 - (20) 天保二（一八五一年）三月一日付の調査書「御国産捌一条二付吟味書」（前掲註17「御国産一件」を所載の写）の以下の記載による。なお、松田氏によれば、同吟味書は、同年二月の藩の産物掛任役らからの問い合わせを受けた江戸勘定頭の三月十一日の回答に付されたものである。吟味書の概略は前掲松田論文表1に示されており、以下引用部分は同表の項目の3の一部に該当する（傍線・（ ）表記は筆者による）。
 - (21) 明治二二年二月の東京府の調査に対して東京漆器問屋組合が提出した「維新前営業慣例上申書」に掲載された、嘉永四年十二月の仲間の「嘉永度規定書中旧記」による（『江戸東京問屋史料商事情例調』東京都、一九九五年）。
- （前略）捌縮ミ、直段売崩し候者専ら抜物方起候形、扱御取締前々御世話在之候得共、時々在之歟二相聞候処、田舎出塗物取斗之間、譬者水戸出し之形ヲ以御国表ハ持出候而も、出先方引逃、御府内江持込或ハ中途引受候他邦者右之業いたし、又ハ全御府内迄二無之近力間江隠置キ、便宜ヲ以追々持込候類、皆以御府内問屋共売先差塞キ候故、此段問屋共兼而相歎、御取締之義も度々申出、

勿論田舎出之分ハ手拔之品々取扱、^(組)連^(純)淳直之商舨^(純)ハ不相聞^(※)、塗荷共

江安ス上リ注文ニ及、いつ懸ケ等ニ致候^(而)而も似タリ粉^(而)歟申候を相用、新敷内

ハ随分堅キ品^(而)爲見候得共、老兩度も用候へハ光沢消工黒ク相成候^(而)申様之

品々多分持出候歟^(而)、御国産物塗物近來者^(而)以前之堅固淳直之名ヲ取失ひ、

物之唱ニ預リ、右手くろ^(略)うもの之ためニ江戸出淳正之品も捌疎ク、直段も被押、

問屋氣請もあしく相成候形、全舨田舎出之義ハ出荷増取斗而已^(者)無之、専ら

拔荷防キ之見込申出候者有之、爲試田舎出シ人別相極メ候斗^(而)株式^(而)申程之

事ニも無御座候故ニ伝承仕候處、時所爲ニも違ひ、反而拔荷悪行之病付キ、加

ルニ直押被致捌縮ニ候始末ニ至候趣ニ寄々相聞申候間、此度ハ田舎出被相止候

上、拔荷ハ取抑候者ニ被下候様ニ成、然ハ素る姦利を心懸ケ候仕業ニ候間、損

分ニ当り候、令御懲ニ御座候ハ、格別御取締ニも罷成可申哉^(者)存候、且ツ前文

之通り、田舎出人別之者ニ御座候ハ、株金運上等者^(者)有御座間敷候^(者)存候處、

若し跡方追々加入之者莫加寸志金等差出候儀^(可)在之歟ニ候へ共、迎も人別丈

ケ、此節出荷取斗候儀共不相聞候へハ、聊之金高ニ可^(在)御座候哉、右金返^(者)歟

納懸リ之分其向見当テ等^(而)差支候義御座候ハ、夫丈ケ位ハ江戸出商人并居

店之者^(江)相論候ハ、相償候道も可有之歟、其訳^(申)申てハ田舎出相止候得ハ問屋

売先々捌宜敷、自から直上ケニも可相成、注文相増候者^(顯)然ニ在之、又居店之

義ハ他邦^(如)以前仕入人込候様ニ相成、商ひ繁榮いたし、兩商共ニ差見^(江)相

而下品之唱ニ相成、次第二不同ニ相成候由相聞、虚実ハ如何御座候得共、何れ

モ道を離れ、一術ヲ以取斗候儀ハ難飛付キ、永続致かき事ニも可有御座候哉

ニ被存候、其向参考ニも可罷成者、聞^(江)し儘申上候^(上)

(22) 「諸物価際立直段引下ケ、メ売、メ買^(者)不及申、品劣り、掛目減等之義無之、

一切正路に売買可致^(一)「幕末御触書集成」第五卷、岩波書店、一九九四年、

四三一六(四)の品質の維持(品劣り)を指していると思われる。ただし、

仲間としての主眼は値段の均一化であろう。

(23) 有限会社津屋漆器店のホームページ <https://www.tsuwa.co.jp/> にする。閲覧

日二〇一九年五月五日。

(24) 七一〇「(旧戸籍重要書類一括)」。

(25) 大正三(一九一四)年刊『全国商工人名録』(第五版)では、同書第三版(明治

四〇(一九〇八)年)で通一丁目七番地の「漆器商」岡田利吉という人物が、

青物町の住所で「会津屋本店」として掲載されており、同様に屋号や権利を一時

譲った可能性がある。その後、昭和六(一九三二)年刊『大日本商工録』の漆器

指物類の項では、岡田利吉は日本橋江戸橋一ノ七に移転し、杉田重太郎が小石川

餌差町三三で記載されている。

(26) 「漆器問屋組合設立願指令并に主務者へ届 東京漆器問屋組合設立認可願」

(普通第2種 願届届録・商賈組合・下(農商課) 東京都公文書館蔵) による。

全体を墨消しされていることから、実行されたかどうかは不明である。寸法は、「表間口四間式尺・裏幅四間、奥行式拾壹間四尺」で九三坪八合八勺八才となっている。「六大区沽券地図」（東京都公文書館蔵）によれば、明治六年段階では五〇〇円であった。なお、一〇番地は二三番地に変更となる（明治一七年「東京実測全図」）。

(35) 七十八。作成者、作成年が不詳だが、内容から塗物間屋のものであることは確実であり、売場支配の新七が万延元年三月に暇乞いを認められた新七（六一四四）「引取申一札之事（新七義御暇聞済被下当人衣類等不残受取につき）」と同一人物とみて、会津屋のものと判断した。

(36) 七一四一〇一八「（所有之建物抵当トシテ金七〇〇円借用証写）。土地を抵当とした借用証文と同様の経緯で作成されたと考えられるが、捺印がなく、宛先も記されていない。

(37) 前掲半田書、六二一頁・六七〇頁。鷺崎俊太郎「幕末期における商人移動の人口地理学的分析―横浜開港に伴う豆州下田欠乏品売込人の転入経緯と世帯構成の変遷」『歴史地理学』四四二、二〇〇二年、図2。

(38) 六一三二「金円借用証（金一〇〇〇円）。先にあげた七一四一〇一九「地所書入之証（金一〇〇〇円）」と宛先が同じであり、同様の経緯で作成されたと思われる。こちらは明治二〇年九月二六日に完済したとある。

(39) 六一一八「（通鍋町所持地面絵図）。地代の表記が「匁」であることから、近世の史料と判断した。

(40) 七一五二「（八丁堀家主伊三郎水谷町家作店賃取立帳など一括）。

(41) 六一三〇「売渡申家作一札之事（建家一ヶ所・代金七〇両）。本文は「子三三」であるが、端裏書は「慶応二寅年三月」となっており、年代を厳密に特定しえなかった。宛名部分を削除しているため、おそらく返金したものと思われる。

(42) 江戸では、三月に雛人形とその道具を販売する市がたち、その最大のものが十軒店の市で、江戸の風物詩となっていた。十軒店の表店は、この期間になると雛問屋たちに店舗を明け渡し、町内はすべて雛問屋の市場となった。これに加え、通りの中央に仮設の店舗が置かれた。これが出小屋で、こちらでは表店を利用する商人より零細な者が中古品や道具を扱った（岩淵「問屋仲間の機能・構造と文書作成・管理―江戸一番組雛問屋を事例に―」『歴史評論』五六一、一九九七年）、岩淵「江戸の雛市―「際物」を見る・売る・買う―」（『和宮ゆかりの雛かざり』国立歴史民俗博物館、二〇一一年）。

(43) 六一三八「買取申一札之事（当町内離市出小屋当年より改諸入用一両二分二相定貴殿方へ貸附につき）。包紙は六一二二。以下、希少な資料のため、全文を掲載する。

(44) 四一「先納金請取通」、「明治十年太陽略暦」（江差町教育委員会蔵A―

一七九一三三三）。このほか実際の暦の「売弘者」として、慶応三年「懷中暦」（国立国会図書館蔵本別一五二二）で「江戸暦開板所会津屋徳兵衛」、大学星学（包紙）「上」

買取申一札之事

一 貴殿所持之間口九尺・奥行一間之雛市出小屋壹ヶ所、此度当町内二面金七兩二買取、則金子相渡申候、然ル所当年方改メ、右小屋此方二面掛ケ、諸入用共金壹兩貳分二相定メ、貴殿方江尚又相貸付可申候、尤是迄通、年々雛物商内被致候者、右小屋代等一切直上ケ致申間敷候、爲念一札仍而如件、
天保九戌年二月 本石町十軒店月行事 立合 利兵衛印 忠兵衛印

徳兵衛殿

局編「明治五年壬申領曆」（早稲田大学図書館蔵二〇五 〇二五〇三）・文部省天文局編「明治六年癸酉領曆」（同前二〇五 〇二一九九 〇二二三）・明治八年乙亥太陽略暦」（国立国会図書館蔵Y九九四―L二二九八）で「弘暦者 東京 相田徳兵衛」が確認できる。

(45) 六一四五「差入申一札之事（石川六三郎荷物之儀積送り不埒ニ付仕切代金滞り今般代金不残受取につき）」。

(46) 五一三「請取申一札之事（当産物諸品引請御蔵元被勤金二〇〇両請取につき）。『彦根市史』では彦根藩の専売品の一つとして量表をあげているが、この時期の量表の専売のしくみについては不詳である（『彦根市史』第二巻、彦根市、二〇〇八年、第五章第四節）。

(47) 七一三「為取換契約証」、七一四二「解約証（日にやけぬ水外五品製造販売取消につき）」。

(48) 七一三 慶応二年五月「奉差上一札之事（京都為替方杉田英太郎へ旧来熟談手続につき）」。

(49) 山中雅子「尾張藩京都御用所の設立とその運営について」（『尾張藩社会の総合研究』第四篇、清文堂出版、二〇〇九年）。

(50) ①の場合、同じ日付で金額のみの證文六一〇「預り申御金手形之事」と担保と領主の裏書がある證文五一二「奉預り御金別紙引当手形之事」の二通が提出されている。②も同様であろう。

(51) 六一四一「南部家筋金三九二両御用預引替につき写」。

(52) 菅野和太郎「紀州藩御用金」『経済論叢』三四（三）、一九三二年。

(53) 「明治一四年三月（一八八一年）、初代新井清太郎（現在の栃木県佐野市生まれ、千葉県香取郡清川村（現・下総町）から横浜に移り（当時、数え二一歳）、以後、本町一―二の漆器売込商、会津屋商店を振り出しに仏、独系商館に勤務。」「明治二年（一八八八年）四月、初代清太郎、尾上町一―一〇（当時、神奈川県横浜区、翌年四月、市制施行により横浜市となる）で、個人経営の貿易商、新井商店を開店。麦稈真田、製鳥、骨董の外国商館への売り込みを業務とする。」（株式会社 新井清太郎商店ホームページ）<http://www.seiwaara.co.jp/in/profile.html> 二〇一九年五月一四日閲覧）。現在、新井清太郎商店として、球根・盆栽や香辛料の輸出入をてがけている。

(54) 以下、明治一二年七月一四日の「（借用金年賦証書之事・本紙証年賦金償却実際之方法）」（七一―四一九）による。同史料は会津商人への代金の返済方法の提案書である。

(55) 七一五―三「（若松行往復日記、旅費等書上帳）」の綴りに含まれていたもので、冒頭に「初見君江相渡控 廿年六月十三日」と記されている。

(56) 四一五「記（金銭請取簿）」。「地方の漆商が含まれ、また明治三二年五月から三三年一月までの記載がある四一―三「金銭請取簿」でも同じ人物が「払」「現金買入分也」となっていることから、支払いの帳簿と判断した。

(57) 江戸干鰯問屋の例（原直史『日本近世の地域と流通』山川出版社、一九九六年）などを参照。

(58) 六一四七「入置申一札之事（仕入物代金之義一節季送り勘定頼申入、外二金一〇〇兩分代品物送り被下につき）。六一二三が包紙である。原文は以下の通りである。

包紙上書「文政十一子年 伊七屋武兵衛殿 規定証文書通」

入置申一札之事

一 我等義格別御最願御取立二預り、仕入物代金之義一節季送り勘定二被成下候段御頼申入候処、御承知被下置存候、猶又是迄本郷御弓町二数年來住居仕渡世致来候処、近年現金商内不景氣にて減少仕候二付貴殿御心付二而此度幸ひ池之端仲町大榎屋家土蔵売居二相成候二付、貴殿御世話を以金百拾兩二買取候代金并二普請諸入用金百貳拾兩二先規本郷住居所売払候迄式口メ都合金貳百三拾兩二金三拾兩老歩之利足二而借用申処実正也、親類一流泰仕合二奉存候、右場所相統致候而者、是迄持代呂物二而者不足二而商内向行届キ不申候間、此度乃是迄之勘定之外二金百兩分丈代呂物御送り被下、右之分者延々二而當極月二勘定皆済可仕等之処、当子ノ七月迄無利足二而置居二被成下候趣、達而御頼申入候二付御承知被成下忝存候、限月皆済可仕候、万一其節勘定出来兼候得者、寅ノ八月分金三拾兩老歩之割合を以勘定切候迄利足無相違相渡可申候、右様御取立二預り候二付、子孫ニ至り候共直仕入者勿

論、外方二而仕入物等聊たり共仕間敷候、尤親類一統相談之上規定取極メ申候上者、後年二至り候共違論ハ決而仕間敷候、万一盛衰有之候而相統出来兼候節、家・土蔵・株式共貴殿江壳渡、私支配人ニ御付、家銘御立被下候対談ニ御座候、為後日永代規定一札仍而如件

文政十一子七月
会津屋徳兵衛殿

池之端仲町 伊勢屋武兵衛 ㊟
妻 みや（爪印）
母 せよ（爪印）
湯嶋中坂下 親類 卯之松 ㊟
本郷三丁目 親類 玉川仁兵衛 ㊟

なお、六一三一「覚（池之端一件立替金子受取通につき）」によれば、子六月二日より一〇月二六日まで一〇回にわたって計金一二〇兩を伊勢屋が会津屋から受け取っている。「左官治兵衛払分」という回もあることから、池之端の普請諸入用金一二〇兩の受取と思われる。

(59) 前掲「問屋株帳」（東京大学経済学部資料室蔵白木屋文書）によれば、池之端仲町斧吉店の大榎屋善蔵は、茅町組雛人形手遊問屋株を文政七年九月に本町二丁目卯八店の金枳屋徳右衛門（京都住）に譲っている。おそらく株式の譲渡だけで、家・土蔵はそのまま所持していたのであろう。

(60) 帳末に「此帳簿付込期限」を「至明治四拾年拾二月至同四拾一年拾壹月」としているが、実際には前欠で冒頭は明治四一年一月二五日からはじまり、同四二年五月一八日で終わっている。

(61) 『東京市史稿 市街篇』六〇（四四三―四六七頁）、同七二（六五―八一頁、三六四―三七〇頁）、同七三（三三九―三四四頁）、同七四（三九三―四〇五頁）、同七九（一〇九―一一七頁、四八五―四九一頁）。観工場については、初田亨『都市の明治』（筑摩書房、一九八一年）、同「勸工場の設定とその後の変遷」（『日本建築学会論文報告集』三二九、一九八三年）等を参照。

(62) 第三区美術第二類書画で「同（蒔絵）筆筒・泥障等 四千三百円売額四千八百円 宝暦年間 大伝馬町二丁目柴田卯之助 相田徳兵衛」とある（『明治十年内国勸業博覧会出品解説』四『明治前期産業発達史資料』第八集、明治文献資料刊行会、一九八六年）。

(63) 六一二「約定証（東京観工会社出品物看護之義相守につき）。契約を結んだのは、会場に近い芝区三島町六番地の小林孫之助で、「品物売上手数料」として「百円二付一円ノ割合」で払うとあるため、おそらく商品販売を会場で行させたと思われる。

(64) 四一八「売上帳簿」。

(65) 前掲註3岩淵「江戸の贋酒」、同「偽物をめぐる近世と近代―商標条例をめぐって―」。

(66) 吉田伸之「巨大城下町」「表店と裏店」(『巨大城下町江戸の分節構造』、山川出版社、一九九九年(初出は一九九五年・一九九二年)、前掲註7岩淵「大店」。

〔付記〕 本稿第一章は、拙稿「近世における漆器生産の広がり」と流通」(『RUSHIふしぎ物語―人と漆の二二〇〇年史』、国立歴史民俗博物館、二〇一七年)の一部を改稿したものである。本稿の執筆にあたり、史料の研究利用をお許しいただいた有限会社會津屋漆器店様に篤く御礼申し上げます。

学習院女子大学国際文化交流学部日本文化学科、

国立歴史民俗博物館共同研究員

(二〇一九年五月二八日受付、二〇一九年八月五日審査終了)

付表 会津屋奉公人の業務分担

	役割	担当者	役務内容
1	大帳場	吉兵衛・手替清七	諸役改革向取締改役／得意諸職人持出し物其外出入指引改／日々金銀出入勘定／請取仕割印控／台所賄方諸入用勘定取締／川岸土蔵月々ニ両度改立会
2	中帳場	清七・手替り幸助	諸国注文惣仕切／本帳・水揚帳一切引請／会津荷物取調差図／毎夜錠前江改方／日々食事之節順番廻ニ不相成様差図可致事 并ニ台所猥かハ敷不相成正し可申事／毎朝一同起候事
3	別帳場	書役	当座帳一切引請并ニ口帳帳／中帳場帳合方法事手伝／日々川岸土蔵出入控／毎朝中帳場之者起シ候事
4	売場支配	幸助 手替り新七	屋舗向諸事引請
5	売場支配	新七	子供惣取締／奥土蔵・内土蔵取調差図／地物仕入方／毎夜セリ帳取調／同川岸土蔵出入指引改／下駄雪駄取締改役／年季者衣類洗たく引受／下タ町掛廻り
6	売場	宗七 川岸土蔵手伝勘次郎 見本物仕立方手伝 栄次郎	会津荷物引請／川岸土蔵取片付引請并ニ日々出し方／見本物仕立方／外箱類一切引受
7	売場	又兵衛 仕立方手伝 菊蔵 栄次郎	袋物一切仕立役／せり物渡し方支配 尤其時々急度疵相改可相渡候事／山之手掛廻り／諸方水揚改役／傘提灯取調差図
8		菊蔵	内土蔵片付役并しころ口付／せり物一切出し方／田舎出し荷物作り方
9		栄次郎	奥土蔵片付役／せり物一切出し方／田舎出し荷物作り方／神宝方
10		勘次郎	諸方使／川岸土蔵片付諸事手伝／毎夜風呂敷改□□役／見世二階三階毎日取片付／あんと掃除
11		熊次郎	諸方使／傘燈籠取集方／毎朝ふきそうし
12		鉄次郎	諸方使／田葉粉盆掃除
13		佐助	諸方使
14		鎌吉	諸方使／下駄雪駄取調毎夜取片付／表内庭はきそうじ／毎朝燈籠ほんほり改
15		甚之助	見世方茶番／銭出入一切／硯箱掃除墨すり
16		下働	台所食事仕度／のれし（んか）掛をろし／土蔵前外廻り取片付

7-8「役割之控（附規定書）」より作成。／で一つ書きの冒頭を示した。